

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	同志社大学	拠点番号	J24
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	一神教の学際的研究(文明の共存と安全保障の視点から) Interdisciplinary Study on Monotheistic Religions		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:地域研究〉(異文化コミュニケーション)(比較文明論)(安全保障論)(地域間比較研究)(比較法)		
専攻等名	神学研究科(歴史神学専攻)、アメリカ研究科(アメリカ研究専攻) 法学研究科(政治学専攻)、文学研究科(哲学専攻) 研究開発推進機構(一神教学際研究センター)		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 森 孝一 教授 他 17名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等:大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 本拠点は、キリスト教神学、イスラーム学、ユダヤ教研究、(比較)宗教学、地域研究、国際政治学、科学史、比較文明論研究、アラビア語・ヘブライ語教育をカバーしている。</p>
<p><本拠点の目的> 同志社大学の建学の精神を生かして、宗教・政治・文化の教養を学際的に身につけた、文明の共存のスペシャリストを育成することを目的としている。特に9.11テロ事件以降、西欧とイスラーム世界の文明の衝突状況が顕在化しつつある中で、一神教世界の構造と論理を析出し、対話と共存の道を模索することは国際的にも期待されている。本拠点は、そうした課題を引き受けながら、今日の世界が抱えているジレンマの一つである、近代化(世俗化)とその反動(原理主義的宗教の復興など)を視野に入れ、国際世界に対し平和形成のための学問的・政策的提言を行うことを目的としている。また、世界における一神教世界の動向を日本社会に正しく伝えることも重要な目的となる。</p>
<p><計画:当初目的に対する進捗状況等> 研究のための基盤として、二つの部門研究会と二つの特定研究プロジェクトを立ち上げ、国際会議において研究方針的確さを検証しつつ、報告書やウェブサイトなどで、すべての研究成果を公開してきた。マレーシアにおける教育拠点を確立し、また、ヘブライ大学(イスラエル)とクフタロウ財団(シリア)との学術協定を締結した。また「一神教学際研究コース」を神学研究科に新設し、平成17年度より開講し、若手研究者の養成を本格的に始める基盤を整えた。</p>
<p><本拠点の特色> 西欧の宗教学の伝統の中では、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの個別研究は蓄積されているが、それらを包括的に一神教として総括しうる枠組みはまだ提示されていない。その課題を、文明論的な視座を持ちながら、学際的な研究として受けとめようとする点に本拠点の特色がある。また、世界の安全保障論で軽視されがちであった宗教的・文化的要因に着目して、安全保障論を研究していることも、本拠点の特色としてあげることができる。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 欧米とイスラーム世界の対立抗争の歴史は今なお継続しているが、歴史的しがらみから自由な「外部」に位置し「中立的」「客観的」な研究が可能な日本から、一神教研究を発信する意義はきわめて大きい。しかも、英語・アラビア語・日本語による成果の発信は、国際世界の関心を喚起しつつある。また、多神教と一神教の文明論的背景や両者の接点を探りながら、より建設的な多文化共生のパラダイム構築を目指す本プログラムは、日本社会に対しても重要な意味を持つと言える。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 「一神教学際研究センター」は、文明の共存と国際安全保障を視野に入れた一神教研究の重要拠点として、イスラーム世界を含む国際世界において広く認知され、国際的な学術ネットワークを形成していると考えられる。また、神学研究科「一神教学際研究コース」の修了生たちは、文明の共存のためのスペシャリストとして、各方面において活躍していることが期待される。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 本プログラムは、一神教世界を「外側」から見渡せるという日本の地理的・文明論的な利点を生かすことによって、政治的な力学関係でのみとらえられがちな西洋文明とイスラーム文明、あるいはユダヤ教との関係を、総合的・学際的に世界に提示できる。また、イスラームの精神を反映した「政教一致」国家群と、欧米に多く見られる「政教分離」国家群の対立に関する諸問題をも視野に入れ、具体的な政策提言や社会への問題提起を行っていく。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) 現代問題を基点にしてキリスト教・イスラーム教・ユダヤ教を学際的に比較研究する視点はユニークで魅力的であり、本テーマにつきかなりの成果が蓄積されているが、しかし世界水準と判断できる成果を達成するまでには至っていない。この成果を得るためには、現代問題だけを追っていたのでは不十分であり、いわば基礎研究としての「一神教の再考・文明の研究」をさらに深めることが必要である。また、一神教の理解を深めるために、仏教や多神教との比較研究の必要性は認識されているが、このための体制づくりはまだ十分には行われていない。人材育成のためのシステム構築は評価できるが、プログラム参加者の有機的連携をいっそう緊密にし、一神教間・および一神教・多神教間の比較研究のための体制づくりを急ぐことが必要である。</p>